

## 情報・通信の利便性向上，課題はないのか？

電気電子工学科 竹本 泰敏

近年，コンピュータ関連の技術革新には驚きを隠せない。また，私たちの生活のなかにも深く入り込んできている。かつてはパソコンと言え，大学などの学術機関にあるようなスーパーコンピュータ，研究で数値解析などに用いるような「計算機」という印象のものや，「文章作成」，「表計算」というようなビジネスユーズのイメージが強く，今日のような各家庭に1台はあるというようなものではなかった。それが，今日では各家庭どころか，スマートフォンのような携帯端末でも，インターネットの閲覧が可能であり，写真や動画などのやり取りが容易にできる。情報通信をはじめとした，コンピュータ関連技術の進歩は，私達の生活に，多大な情報のやり取りを可能にしている。しかし，この多大な情報量のやり取りを簡単に行うことができる現在の状況に課題はないのであろうか。

数年前，私がまだ大学の学部の学生であったとき友人の学生がテスト前やレポート提出を待っている際に，「Google 先生」という言葉を耳にした。なにか，わからないことがあれば「Google 先生に聞いてみよう」などということをよく言われた記憶がある。最初に聞いた時は，「？」という印象であったが，よくよく聞きいてみると，インターネットの検索エンジン「Google」に知りたい言葉を入力して該当する HP を探して答えを探すことのであった。当時は，自分自身もレポートを書く立場の学生であったため，「便利！！」，「楽」というのがお恥ずかしいながら，正直な感想であった。しかし，レポートを担当教員に持っていくと，何かを察したかのように最初の質問とは別の質問の仕方での質問をしてくる。結果は，答えられない。理由は簡単で，インターネットで検索すると書籍を用いる場合に比べて知りたい内容が，「どのような分野」なのか，「その関連知識」などを把握し理解できていないためである。確かに，「どの本を探せばよいか」，「本のどこに書いてあるか」などを考える手間もかからないため，特定の利用条件では便利である。しかし，関連の内容や知識を得ることは書籍とは違い，できない場合が多い。一昔前の，電子辞書と同じようなものであろうか。さらに，最近の学生の様子を見ると，「わからないこと」はすぐに，スマートフォンで調べている様子である。これは一見，便利のように思えるが，さらに，容易に検索できるためか「何故か？」という疑問を解決しようとする時間が減っているようにも思える。

今日ある，インターネット環境やスマートフォンのように手元にいつも情報端末があるということの利便性すべてを否定するつもりはない。しかし，多大な情報量を容易に得ることができるインターネット環境が当然となっている今日，その利用による弊害も常に意識しておく必要がある。今年度は，情報処理センター委員として学内の情報関係の運営に微力ながら関わらせて頂いた。私自身も，学生から教員へと立場が変わり，教育現場にいる以上，「便利さ」を共有するとともに，「教育効果」を最大限引き出すことを意識していきたいと思う。

便利な中の危険

物質工学科 佐々 和洋